

御木宏美

Hironori Miki

御木宏美
なせ



illustration

新田 祐克



YUKARI

SUGURU

TASUKU

ISAMU

野蛮なセレブ

《立読み版》

御木 宏美

イラスト 新田 祐克

日本のホテル御三家の一つの正面玄関前に、黒塗りのロールスロイスやリンカーン、キャデラックなどドリムジンの長い行列ができていた。

後部席から降りたゲストの大半は、男性はタキシード、女性はイブニングドレスか和服の正装である訪問着を身に着けていた。

華やかにドレスアップした一団が向かう先は地下のバンケットルーム。赤い絨毯が敷き詰められた階段を下りると、その先は上流階級のサロンだった。正面の大きく口を開けた扉の前で蝶ネクタイを締めた四人の案内係がゲストの差し出すインビテーションカードをチェックしている。

「これは高倉様、ようこそいらっしやいませ。本日のパンフレットでございます」

一人一人に うやうや 恭しく差し出される冊子は薄いが、表紙には本革が用いられている。

受け取ってバンケットルームのなかに入ったゲストにはシャンパンが差し出される。

そこはこのホテルで一番広いバンケットルームだった。

時刻は六時過ぎ。集まったゲストの数は二百人を超えていた。男女比は七対三で、半数が日本人。残りにはヨーロッパ、アメリカが多勢を占める。ゲストの八割は四十代以上の熟年層である。

ゲストたちはパンフレットとシャンパンのグラスを手に室内を歩き回って、そこに飾られた絵画や美術工芸品を眺めていた。その数はちよつとした美術館ほどある。作品の一部には一から五十までの通し番号がつけてあった。番号のあるものには、ゴッホ、ルノワール、モネ、ピカソ、ゴーギャン、尾形光琳おがたこうりん、狩野探幽、絵画では世界に冠たるビッグネームが並んでいる。

それだけの作品を展示するとなると警備ものものしい。会場のそここに仕掛けられた監視カメラに加えて、部屋の内外合わせて三十人の警備員が配置されている。

きらめくシャンデリアと世界的に価値のある美術品と美しく着飾ったゲストと厳しい目付きのセキュリティ。微笑みと緊張。異質なものを同時に抱え込んでバンケットルームは次々と訪れるゲストを迎えていた。

雄たけしも入口でもらったパンフレットをタキシードの脇にはさんでぶらぶらと展示品を見て回っていた。二十五歳。今夜のゲストのなかではもつとも若い部類に属する。見栄えもいい。身長百八十四センチ。筋肉質だが細身で、かといってひ弱な感じはなく、バランスが取れている。髪は黒で眉がきりつとして目付きが鋭い。

「よくもこれだけ集まったものね」

隣を歩く優すぐるが独り言のように呟つぶやいた。こちらは身長百七十五センチ。女性で、ボトムが細身のパンツの黒いスーツを着ている。髪は金色近くまで色を落として右の耳を出したショート。歩きたびにダイヤモンドを並べた揃いのチョーカーとブレスレットとイヤリングがきらめく。身長は高いが身体付きはスリムだ。顔も整っていて、宝塚歌劇団の男役のトップスターを思わせる華やかさと凛りり々しさがある。年齢は雄と同じ。

「今夜、出品された作品の推定評価価格は百億。これでまだほんの一部だ。最低でもこの百倍が銀行の地下に眠っている」

「バブル期の経営者がいかに無能であったかの証ね」

「同感だ」

どちらもごくクールな口調で言う。

黒いジャケットに膝丈のタイトスカートという宴会フロアの制服を着た女性が銀のトレイにシャンパンのおかわりを乗せて二人のそばにやってきた。

「いかがですか？」

「けっこう」

二人は揃って答えた。女性は別の客のほうへ行く。会場には彼女のような酒の給仕係りが二十人近く配置されていてゲストの間を回っている。シャンパンのほかにスコッチやワインやビールが揃えてある。いずれも無料で飲み放題だ。

「気前がいいな」

「酔わせて判断力を鈍らせ落札額を吊り上げようって魂胆でしょ」

くろかわ

「玄川さん!? 玄川さんでしよう!?!」

不意に前からやってきた六十前くらいの男が雄と優に向かって声を上げた。二人は顔を見合わせた。男は身長百六十センチ前後。地肌のみとなった頭頂部に八・二に分けた髪を見事に並べ、ずんぐりした体格に白いピンストライプが縦に走る濃紺のダブルのスーツ。エルメスのネクタイを締めて胸ポケットに揃いのチーフを飾っている。

男のセンスに雄は呆れた。ピンストライプは背を高く、体格をスリムに見せるというが、実際はある程度の身長がないと逆に寸足らずに見える。おまけに顔は田舎者を絵に描いたようなのだかさ。てかてか脂ぎった額の下にクリクリの目。隣で優も笑いをこらえている。

「覚えていらっしやいませんか!? 東北新幹線の青森開通のレセプションで一緒にさせていただきますました津川です!」
つがわ

「え、あ、ああ」

「いやあ、そのせつはどうも!」

言葉に津軽訛りが混じっている。東京で生まれ育った雄と優には聞き取りにくい。実際のところ男の名前もツナワだかツワワだかに聞こえる。男だけがなにも気付かずどんぐり眼をらんらんと輝かせて、

「いやいやいや、今日はお二人ですか!? 玄川さんがオークションにご参加なさるとは、いや、これはもう私ら庶民はとんだ無駄足でしたなあ。いえ、あの新幹線の用地買収でね、少しまとまった金が入ったものですから、一つ、絵でも買ってみようかと思っただんですが。いやもう玄川さんのおいでになるとは。私らなんか勝負にもなりません」

雄と優が口をはさむ間もなく男は機関銃のようにしゃべって声を上げて笑う。

「あ、そうだ、名刺! いえ、私、事務所を変わりましたね。これもみな玄川さんのお力添えをいただきましたおかげで。これからどうか一つ末永いお付き合いをお願いいたします!」

男は二人に恭しく名刺を差し出した。

「それでは私はこれで。いやあ、玄川さん今日はどうぞお一つお手柔らかに頼みます。ではでは」
一人でしゃべりまくって男はどたどたと去っていった。短い足だが行動はすばやい。

雄は名刺に目を落とした。津川宗雄^{むねお}。代議士だった。青森県開発委員会名誉理事、農業振興会代表、漁獲資源を考える会顧問、東北風雪災害対策委員長ほか小さな名刺の両面にぎっしりと肩書きが記されている。おまけに写真入り。

雄は指にはさんで顔前にかざしながら問うた。

「知ってるか？」

優は肩をすくめた。

雄は通りかかった給仕係りを呼び止めた。

「捨ててくれ」

同じように優も給仕係りのトレイの上に名刺を置いた。

再び二人は展示品を見て回った。

通し番号がついた五十点は、今夜、競売にかけられる作品である。展示会は出展品を入札参加者に見せるために開かれている。競売会を仕切っているのは世界的に名の知れたロンドンの競売会社の日本支

社で、主催は日本の大手銀行六社。出展品を所有しているのもその六社である。

雄と優は一幅の掛け軸の前で足を止めた。紫雲に立つ観世音菩薩と赤い布に包まれその足元で無心に眠る赤子。

作者の名前の前に番号がついている。雄はパンレットをめくった。

『非母観音』。安土桃山後期から江戸初期の狩野派。一九八〇年、オランダの旧商家から発見される。

八十八年、ロンドンにて大阪のコレクターが六千五百万で落札」

「赤丸つき？」

「ああ。最低希望落札価格四千万。この軸のどこにそれだけの価値があるんだ？」

皮肉な口調で言いながら雄は掛け軸を眺めた。

ふくよかな頬に透き通るような白い肌の観世音菩薩。無垢な寝顔の赤子を見下ろす表情と眼差しのなら

かに慈愛が浮かんでいる。静かだが慈しみ溢れたその微笑みに雄は不快感を覚えた。

「キリスト教には聖母子が多く描かれているけど、仏教で赤ん坊は珍しいわね。鬼子母神かしら」

「さあ……」

表情には出さなかったのに声の調子で優は雄の変化に気付いた。

「母親は鬼門、ね」

答えずに雄は再び歩き出した。無視された優は怒ったそぶりも見せず、

「祐も連れてきてやればよかったわね。雄たちだけずるいって拗ねてたわ」
たすく

「子供にオークションなんて見せるもんじゃない」

雄はぶつきらぼうに答えた。クスリと優が笑う。

「過保護すぎるわよ。あの子ももう十六。そろそろ社会を知るべきでしょう」

「まだ子供だ」

「そうやって並んで歩いてるとカップルみたいだぜ」

雄と優は足を止めて振り返った。勇がニヤニヤと笑いながら二人を見ている。
こめ

身長百八十センチ。髪はトップをツンツンに立たせたショートで、色は金と茶と黒がトラの縞のよう

に混じっている。服装はタキシードだが蝶ネクタイは締めずくつろげた襟のなかに鉾びょうがいつぱいついた

黒い革の首輪。パリのゴルティエの本店で作らせたオリジナルだ。指にもシルバーのごついリングがは

まっている。二十二歳。

優が鼻先で笑った。

「ホモのでしょう。でもあいにく私たち本当にフィアンセなんだけど」

「結婚する気はかけらもねえくせに」

「わからないわ。男と女ですもの。いつなんどき気が変わって一線を越えるかもしれない」
勇が顔をしかめた。

「冗談はやめてくれよ。想像するだけで寒い」

「あら、どうして？」

優は面白がっている。

「少なくとも今の状況なら悠はるかより私のほうが可能性は高いわよ。あれが煮詰まって野獣になれば話は別
だけど」

今度は雄が思い切り洗面を作った。

「その手の冗談は嫌いだ」

優は肩をすくめた。

「そのケダモノと由は？」

「二人ともお宝にご執心。ゆかり由は参考出品のアンティークドールの前でエライさんの胸倉つかんで、一千

方で売ってくれって現ナマ突き出して脅してたぜ」

「またか」

「今度はなに？」

「ジュノーの初期作品だと。服もオリジナル」

「その一千万の現ナマはどこから持ってきたんだ。もう銀行の窓口は閉まってるぞ」

「それこそ脅したんじゃないやねえ？ 今すぐ持ってこなかったらバズーカぶっ放すとか」

雄はため息をついた。

「悠のほうはダイヤのショーケースの前。うっとりひたってる」

「ダイヤって、もしかして一番大きなアレ？」

「そう。五十カラットだか百カラットだかあるっていう、それ。あんまり大きいんでオレはガラス玉か

と思っただぜ」

「あのダイヤ、手にしたものが、みな、非業の死を遂げるといういわくつきなのよ」

「知ってる。一番新しい持ち主もハネムーン二日目にニュージーランドでセスナが氷河に激突して花嫁もろとも黒焦げになったんだろ」

雄は眉をひそめた。

「まさか手に入れるつもりじゃないだろうな」

「わっかんねー。でもそのまさかかもよ。なにしろ惚れたらそれが男であろうとなんだろうと一直線のヤツだから」

雄の眉根に力がこもる。優と勇は雄がなんと答えるか注目している。

「好きにしたらいい。どうせ死ぬのはあいつだ」

「あーらら」

拍子抜けした表情をみせる勇を残して雄はまた歩き出した。優がクスリと笑う。

「本当に素直じゃないんだから」

勇と優は顔を見合わせた。そしてどちらも肩をすくめ、雄のあとを追った。

展示会場にやってきたゲストの数はさらに増え、三百人を超えていた。

勇が周囲を見回しながら呆れ果てた口調で呟いた。

「しっかし、これだけの美術品、よく買い集めたよなー。ホント、バブル期の日本って金があったんだな。その金どこに消えたんだよ」

「あつたのはキャッシュじゃない。評価額という不確かな数字だ」

雄がクールに答えた。

「日本経済は多少の乱高下はあれ必ず右肩上がりに成長する。戦後、信じられてきた神話だ。実際、九十年代はじめまではそうだった。ところがバブル崩壊とともにその神話も崩れた。下がらないはずの土地の値段は十分の一に急落。土地を担保に銀行から金を借りていた企業は多額の負債を抱えて倒産。バブル時代に買い集められた美術品は借金のカタに銀行が没収。四大メガバンクをはじめ各地の銀行の地下には、今、名画や美術品がわんさと眠っている」

「いくら名画でも眠っていれば二束三文のガラクタ。逆に保管に金がかかるしまつ。今の銀行にはその保管料すら痛い。売っ払ってさっさと金に換えたい」

優が皮肉な口調で言った。

「一つ疑問なだけどさ、なんでそのオークションをアジアの端の端、おまけに不況でどん底の日本でやるわけ？ 一円でも高く売りたいんだからヨーロッパやアメリカに持っていったほうが、コレクターも多いし落札額も上がるじゃん」

「簡単だ。海外に移送するとなると運送費のほかに保険料が必要になる。この保険料がかなり高い。だ

いたいその絵の評価額の三から十パーセント。今回出品された作品の評価額は総額百億。単純に考えて運送費も含め十億の経費がかかる。それらは主催者持ちだ」

「なるほど。極貧の銀行サンには十億も痛いつてわけか」

「雄」

「なんだ？」

優はあっちを見てと顎をしゃくった。十メートルほど離れたある絵の前で十人ほどの白人の紳士がひとかたまりになって絵を眺めている。半分はタキシード姿で残りの半分も一目でオーダーメイドとわかる上質のスーツ。年齢はいずれも五十代から上。三人は握りに見事な細工を施したステッキを持っている。棒部は木目の美しさでステッキの最上級とされるスネークウッドだ。

紳士たちは一つの作品について二、三分眺めると、次の絵に移る。その間、誰も会話を交わそうとしない。絵を見つめる眼差しは真剣だ。

「中央の馬のステッキを握った白髪の老人はイギリスのウォーシング卿よ。黒尽くめのスーツに髭の男はベルギーのヒムシュ。ダイヤモンド商。一番背の高い男は南米コロンビアの鉱山王。父親がナチスの親衛隊だったってウワサがあるわ。いずれも世界的に名の知れた美術品コレクターよ。あとの人物の名

前はわからない」

「おそらくは三人と同じ熱狂的な美術品愛好家だろ」

「もしくはプロの投資家か」

「自ら極東の島国にお出ましか」

「あいつらがオレらのライバルってわけか」

勇が目をすがめながら面白そうに笑った。

「ほかにもまだ大勢いるわ。三橋みつはしは八十人ぐらい来るだろうと言ってる」

「激戦になるな」

雄はおどけて肩をすくめて見せた。優と勇が笑う。

「雄様、優様、勇様」

三人の背後から聞き覚えのある厳かな声がかかった。振り返ると、雄が赤ん坊のころからの世話係りわだきはち和田喜八が七人の男たちを連れて立っていた。男たちは全員日本人で、年齢はいずれも五十代前半。グレーか紺の地味な背広に、髪は揃って七・三分け。六人は背広の襟穴にそれぞれ違う銀行の社章をつけている。

「この者たちが始まる前に皆様にご挨拶をと」

七人の男たちはいっせいにしんせつと腰を九十度に折った。

周囲にいたほかのゲストたちがざわめいた。そのなか、男たちの一人が代表して一歩前へ出た。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

野蛮なセレブ

《立読み版》

発行日 2011年6月23日

著者名 御木 宏美

イラスト 新田 祐克

発行所 【MILK-CROWN】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Hiromi miki 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。